

光バスもやってくる。そのため、自動車交通の混乱は開催の混乱に直接つながることになる。

二・公共交通の制御

バスは自動車交通にあたるため、鉄道輸送について考える。玄関口にあたる横浜駅や新横浜駅は現状でも混雑していて、会期内でも通常の輸送はしなければならぬため、開催に伴う輸送をなるべくこの二駅以外に誘導する必要がある。JR東海道線、横浜線、東急東横線、京急線、相鉄線は普段から混雑するため、対策が必要である。

(遠距離)

成田空港からの輸送は、成田エクスプレスと快速エアポート成田を横浜羽沢貨物駅に到着させ、横浜駅に負担の軽減を図る。国内の団体列車についてもこの駅を使用する。駅から会場までは、環状2号線の上下一レーンを専用に確保し、バスを連絡させる。

(中距離)

羽田空港からの輸送は、鉄道だと混雑駅の二回の乗換が必要なため現実的ではない。渋滞対策を考えながらリムジンバスを運行する。新幹線は新横浜駅を利用する。会場までは徒歩またはアクセスバスとする。団体観光バスは港北ニュータウン内に誘導、市有地等に駐車場を確保し、横浜市営地下鉄を利用してパークアンドライド方式を取り入れる。

(近距離)

自動車交通は排除する。横浜線小机・新横浜間に臨時駅を設置し、在来線利用の交通を集約、新横浜駅の負担の軽減を図る。

(この提案には、遠距離、中距離、近距離に

分けた地図による説明が添付されているが、紙面の都合で割愛した。)

⑥ 1. ごみの処理の提案など

(以下一部項目を除き原文のまま)

会場で販売される飲み物の紙コップや缶に番号を付け宝くじとし、後日に当選番号を発表すれば、これらのごみを観客の人は捨てずに持ち帰ってくれないでしょうか。

賞品にメダリストのサイン入り記念品にするのはどうでしょうか。さらに、これらのごみに選手がサインをしてくれたり、記念スタンプを押せたりできてはどうでしょうか。

または、観客が帰る際に選手の人にごみを持ち帰るように言っていたら(簡単なシヨールをしながら)。観客席を土足厳禁にすることで、ごみを床に捨てないのではないのでしょうか。

この提案者からも合計十四件と多数の個別提案が寄せられた。それらの中から、二つ紹介する。

「競技後の混雑解消のために

競技終了後、一斉に観客が交通機関に殺到することを防止するため、適当な場所と時間にイベントを行えば、興味のある人とならない人で帰る時間をずらせないでしょうか。」

「競技の映像の販売

今から十一年後に、どのようなデジタル情報媒体があるかわかりませんが、観戦後の帰りにはその競技の映像がCD-ROMなどになって販売されていれはどうでしょうか。また、デジタル写真としてその人にとって印

象にあるシーンだけを販売する。」

⑦ 1. 子供を主役とする提案

テーマ別に分けると冒頭の表のように分類される今回の職員提案では、子供を主役にすえた提案が多く見られたことも特徴的であった。そうした提案から、二つを紹介したい。(それぞれ別の提案者からの提案。以下どちらも原文のまま)

⑦国連中学オール・オーバー・ザ・ワールド
横浜市は人口三百三十二万人の大都市であり、市内中学校数は百七十七校(平成七年)である。ちなみに、国連加盟国数は現在百八十五か国、アトラクタ五輪参加国・地域数は百九十七であった。

アトラクタ五輪でも日本のメダル数を指摘しかまびすしかったが、驚いたのはあのタイでさえメダルは初めてで若いボクサーが一躍英雄になったのだ。誰でもメダル競争に加わる三十一四十の国の名前は思い出せるだろうが、それ以上は名前はもちろん何もわかることはないだろう。これでも世界中が参加したオリンピックと言えるのだろうか。知名度が低い参加国こそが重要なのが、本当のオリンピックの姿だと思ふ。

今、わが国の中学校は本当に荒れている。依然おさまらないイジメ問題をはじめとして、偏差値社会の中で教師・生徒ともに自信も目標も見失いつつあるのではないか。最も多感な思春期にありながら、過酷な受験競争に隷属し、TVゲームなどに生き甲斐を見いだせないのは、大人の責任が非常に大きいと思ふ。

市内の中学一校に各国を担当してもらい、知名度が低い国の風土・言語・生活・文化・スポーツ・名産物などを研究してもらってはどうか。各学校に希望を募り、出来るだけ自発的に国を発見してもらい、研究対象国を決める。大使館に行ったり、インターネットで調べたり、彼らなりに大人の知らないことを見つけてもらってはどうか。いますぐにでも始められると思う。

そして何年かたつたら、「ジュニア国連総会」を開催する。地球環境問題、人権問題、経済問題など、担当する国の立場から議論し、その成果はピースメッセンジャー会議などに報告する。オリンピックが近づいたら、各国に向け中学生の代表を親善大使として送り、大会にあたってのきめ細かな話し合いを行う。各国の事情を十分に知っているから、贅沢ではなくても心のこもったケアが可能になる。大会中は各国からの選手団・応援団などの世話やホームステイを行い交流を深める。中学生、親、卒業生など多くの市民の心に残る横浜大会が行われることと思う。

ここまでやるなら、同時に何か形を残したい。開港百五十周年記念施設として赤レンガの新港埠頭煉瓦一号上屋（小さい方）を「世界文化交流センター」と位置づけ、それぞれの中学校の研究成果を世界各国のブースに「倉庫」として保管し展示してはどうか。そのほかに市民が自由に活用できる交流スペースや、世界の物産のショッピングスペース、民俗芸能劇場など、市民手作りの施設として創っていく。今出来ることから始め、しだいに成長する施設づくりを目指す。

横浜は国際都市と言われるが、確かに過去の歴史はそうであったとしても、現在の市民生活の中に国際性はほとんど見られないのではないかと思う。今の中学生が十一年後社会で活躍を始めた頃に、本場の「国際文化都市」が実現しているのではないかと思う。

④ちびっ子取材班―縁の下の力持ち編

参加国の全ての国が何らかの形で取材の対象となるよう目標を定める。注目の選手（通常のマスコミの対象となる）以外の全ての参加者が対象となりうる。出場せずに終わった補欠選手、選手村の裏方の面々、組織や機関の職員やそれを支える人等、ありとあらゆる角度から、通常では陽の当たらない人々に小学生の目や耳を向け、二十一世紀を支える子供たちの心を通して全世界に映像とメッセージを発信する。

全国の小中学生から取材テーマ、取材メンバーを公募する。実行委員会のメンバーには小中学生を入れても可。選手村の一角にちびっ子取材班専用棟を建て、全国からの参集に備える。取材現場の映像等の制作には、公募によって選ばれた高校や大学等の放送部員等を優先的にあてる。

この事業に要する経費の一部は、子供やボランティア等、日常の中から積み重ねて貯められる方法（使用済み切手など）や、目的税的発想による宝くじのようなもの等のアイデア募集をする。

実際の放送は、スポット的にならうが、各編を集めて一本に編集し、歴史の一員として記録に残す（次の日本開催までタイムカプセルに入れるもよし）。子供、家庭を中心に市

民の関心を高めるのにも役立つ。

⑧パラリンピックに向けての提案

（以下一部項目を除き原文のまま）

障害者のスポーツはリハビリの段階だけでなく「生涯スポーツ」「競技スポーツ」として欧米では確立しています。テレビのスポーツ番組としても放映されるほどです。

アトラクタやバルセロナなどのパラリンピックは競技としての見ごたえがあるだけでなく、困難を乗り越え肉体や精神の限界に挑む一人一人の競技者の姿がオリンピックでは失った「競技者の美しさ」や「本来のスポーツの感動」を素直に伝えます。

そんな感動体験を世界中の障害のある選手と分かち合うパラリンピックは、市民に理解されパートナーシップで作っていきけるイベントであり、横浜がピースメッセンジャー都市として貢献する大切な機会にもなります。そして、この大会に向けた取り組みとして市民の意識啓発、具体的な民間・公共の福祉のまちづくり事業を進める中で障害のある人や外国人などへの「心の垣根と物理的な垣根」をなくし、ノーマライゼーションと世界に開かれた国際平和文化都市を実現していければと考えます。

●テーマ「横浜バリアフリー都市宣言」―パラリンピックを契機に横浜は実現する

●目的

・障害のある人一人一人が生き生きと自立できる街づくり

・市民だれもが障害の垣根を超えて共生する街づくり

●こんな大会に

・市民だれもが準備段階から参加し、市民に開かれ市民の手によるホスピタリティにあふれる大会運営

・多くの競技が市民の目にふれ、大会をとおして障害への自然な理解とスポーツへの感動体験が共有される

●そのための準備

準備の段階で全市民が参加する「活動的取り組み」と「具体的ハード整備」を行う
(1) 私たちに出来ること 二三〇万人ボランティア

「地域で学校で企業で」あらゆる機会にすべての市民が障害について「学び共に生きる体験」を積む。また、誰もが何かのボランティアとして参加する。

例：全小学校での車椅子・アイマスク体験、企業での「福祉研修」、歩道の違法駐車・駐輪防止のキャンペーン→車関連の業界に働きかけ

(2) ラポールショップ一〇〇〇店

市内の商業施設や各種機関できめ細かなバリアフリー対策を進め、「ラポールショップ」(心の通いあう店)として認定してPR。主な項目としては、点字メニュー、手話での応対、車椅子でも使えるトイレ、段差の解消、必要な介助など。

(3) 公共交通バリアフリー十カ年計画

・市内全駅にエレベーター・エスカレーター設置

・全バス路線に車椅子で乗れる車両を配置

・車椅子が乗降しやすいミニバンのタクシー導入

導入

・モデル地区「新横浜周辺パーフェクトバリアフリー計画」

●特徴的な運営

(1) 「ようこそヨコハマ」ホームステイプラン
可能な限り選手の宿泊をホームステイとして市民が受け入れる。また、市民からの基金を集め海外の障害者を観客として招待し受け入れる。

(2) オープン競技として駅伝、フルマラソン
駅伝(多様な障害区分をつないだ)、フルマラソン(一般も車椅子も参加できる)など大規模アウトドア競技の開催

(3) マリンスポーツの開催

ヨット、カヌー、スキューバダイビングなど横浜らしい海を使つての競技を新たに実施

(4) 生活芸術祭の開催

関連イベントとして、国内外の障害のあるアーティストを中心とした総合芸術の発表とさまざまな市民活動や福祉機器・グッズを紹介する。

この他にも、パラリンピックに関する提案は数多く寄せられた。その中から一つを紹介する。

「オリンピックとパラリンピックの融合」

同時開催をさらに一歩進めて、オリンピックとパラリンピックで同じ種目のある競技は、同じ競技場で同じ日に行うようにする。特に、決勝戦は必ず。マラソン等は、同時スタートも可能なのでは？」

⑨ その他

⑦ 財政計画(資金調達)の提案

(一部省略して紹介)

●調達方法(テレビの放映権料が主な財源であるが他の部分については多くの寄付によってまかなうしかないと考えます。)

とにかく一般市民や商店、企業等すべてに広く寄付を集めなければ財源が確保できないと思います。

●寄付を集める方法

(1) 有名な画家に横浜オリンピックをイメージした絵を描いてもらい、色紙大十入場切符と、絵はがき大十入場切符の二種類を作り、開催一年前から高額で売り出す。絵柄に調和した額縁も売り出し、これを財源とする。

(2) オリンピック施設のあらゆる壁面を利用して、絵はがき大の面積で市民がサインや自画像、絵、プリクラ、版画、川柳などを掲示する。また、競技場周辺の広い歩道や通路に前記とは別に寄付を募り寄付してくれた人の手形とサインを設置する。これらの権利を売って財源とする。

(3) すべての球技で始球式を行い、選ばれた市民が行う。始球式からの発想で、あらゆる競技で市民参加の開会式(始球式)を行う。競技時間の妨げとならないよう五分間程度で行う。例えば、サッカーでは派手な仮装で五人程度のPKを行い、キーパーは正式競技参加者のボランティアとする。陸上競技は仮装して背面五十メートル走を八人程度で。参加者のイベントが終わったらぬいぐるみや仮装をとり、素顔でテレビに写ることが寄付の条件。このイベントへの参加は公開入札としてオリンピックを盛り上げるとともに、財源の一部として活用できる。

①招致イメージマスコットの提案

(実際のイラストはパソコンで描いたカラーのもの)

名前は「ジャンプくん」。ホップ・ステップ・ジャンプと軽快に飛び跳ねるウサギをイメージ。バンダナは海を表すマリンブルー、シャツは大空を表すスカイブルー、パンツは大地の緑を表す濃い緑色。

4 二〇〇八年に向けて

開催概要計画書のJOC（日本オリンピック委員会）への提出締め切りが四月末と目前に迫っており、作業は大詰めを迎えている。職員から寄せられた提案のうちどの程度が実際の計画書に反映されるのか現時点では不明であるが、以上紹介したいくつかの提案は、編集部が独自に調査季報編集の視点からみて、内容的にうまくまとめられたものや、職員としての日頃の職務から得た技術や知識が生かされていると思われるもの、着眼点や発想がユニークで独創的なものをピックアップして紹介させていただいた。ここに改めて応募いただいた職員の皆さまに感謝するとともに、市民・職員手作りのオリンピック・パラリンピックの実現に期待したい。

イメージマスコット「ジャンプくん」

